

自ら評価、アプローチまでができる介護職を目指して

～よりアグレッシブな専門家に～

(株) アール・ケア 通所介護事業部
河野 三恵

【この取り組みを行った目的】

当社通所介護事業部は岡山県内に 10 拠点で展開、リハ特化型デイとしてお客様の自立支援を行っている。PT、OT を各拠点に配置しサービスを行っているが、10 拠点でケアスタッフは 62 名。お客様と関わる時間、量とも圧倒的に多いケアスタッフに知識の研鑽の為、研修機会も設けているが、より自分達で主体的に学ぶ機会を創出したいと考えた。

【具体的取り組み】

平成 29 年度は認知症のケース、平成 30 年度はパーキンソンのケースを拠点毎に 1～2 症例を抽出。まずは自らで疾患の勉強、情報収集を行ったうえで、アセスメント、アプローチまで立案、施行し約半年間に渡り経過を追った。その間も初期、中間、最終評価、考察まで行い、10 拠点のケアスタッフの代表が集まり症例報告を行った。

【実施前の状況】

各拠点にセラピストが 1～2 名常駐しており、介助方法や自主トレの立案、ポジショニングなどさまざまな提案、課題解決を行っているが、ケアスタッフから主体的にアセスメント、評価、アプローチの提案やその機会が少なかったように考える。

【実施後の変化・効果】

ケアスタッフが自分達で疾患の文献を読み、勉強会に積極的に参加するようになった。また、アセスメント、評価、アプローチ内容について提案ができる機会が多くなった。

【結果】

疾患に対する知識の向上、アセスメント能力の向上、対象者への直接的なアプローチ方法の獲得、他職種との積極的な関わり、取り組みを最後まで行う達成感の獲得など。

【考察】

リハ特化型ではセラピストが「リハ」の専門家として様々なことに関与する。しかし、ケアスタッフも「介護」の専門家である。同じようにお客様の自立支援を担う者として今後も主体的に学び、取り組むことができる機会を創出し、よりアグレッシブな専門家の集団を育成していきたい。